

ヤドヴィガ・ロドヴィチ=チェホフスカ

私たちの親愛なる「Maro」、霜田千代麿氏の訃報に大変ショックを受けております。彼はとても大切な人で、ポーランド国内外の多くの人々にとってとても重要な人物でした。

最後にお会いしたのは2022年11月、札幌でした。その時は手の力も弱く、かなり衰弱されているようでしたが、もう会えないとは思いませんでした。

お気の毒でなりません。

ご存知のとおり、私の夫のヴァルデク(ワレマール)は彼のとても良い友人になりましたが、彼もこの悲しい知らせに同様に動揺しています。

どうか心よりお悔やみの言葉をお受け取り下さい。私たちは彼のために祈ります。私たちは彼のことを決して忘れません。

私が Facebook\*にマロの死についてメモを置いたところ、人々がメッセージや反応を送ってくれました。私はそれらを日本語に翻訳しました。これらのメ

ッセージが翌日の悲しい式典に少しでも良い感情をもたらすことを願っています。



(左から)ルーカス・クロスさん、パヴェウ・ヤニウシユさん Włodzimierz Kwieciński 会長、霜田英麿氏

世界伝統空手道連盟のヴオジミエシュ・クフィエチンスキ会長が式典に出席するために北海道へ行くことを知っています。彼はポーランドのスタラ・ヴィエシュ道場から土を持って行きます。

Facebook からのこれらのメッセージが、私たちの最愛のマロとポーランドの友人たちのお別れのセレモニーに花を添えますように。(Jadwiga Rodowicz-Czechowska 元駐日ポーランド共和国大使)

長屋 のり子

霜田千代麿さんは事もなげに生の果ての回転扉を押して彼岸の人になってしまった。あの何か喉につかえたような、音域の広い独特の声がもう聴けない。死因は「老衰」と聞く。死は、今はもうその悲しみ、寂寥さえ削がれるような、必然の静かさで彼にひっそり舞い降りたと知る。仏教に深く帰依した人の法悦に近い、たっぷりとした仏光に包まれた穏やかな死と知れば、執拗に悲しむまい、と思う。

生前に自分の思うところの全てをやり切った人は稀有に近い。彼は自分の肉体の全部を賭して海を渡り、世界に猪突猛進して、今は伝説(レジェンド)と呼んでいい、あのポーランドでの寺山修司との出逢いをはじめとする奇蹟のような彼の生きた歴史を切り開き集積した。

私の手元に、国際寺山修司学会の分厚い研究誌に掲載された、彼の大部の論文がある。寺山修司と母親との関係を「阿闍世コンプレックス」として扱えたものだ。(因みに彼の大学卒業論文は『運命と宿

業感について～ギリシャ悲劇と観経との照応』副論文『ギリシャ悲劇「オイディプス王」観経「涅槃経」阿闍世王』梗概』

彼は前衛的な「書(カリグラフィ)」「空手」「グロトフスキ実験劇場研修生」等々、マッショな趣味人としての印象が強烈だが、彼の根幹は深く「知」を探る人だったと私は確信している。十数年前、私の企画した加島祥造展(小樽祝津)に千代麿さんは岩見沢から殆ど毎日、足を運び、白鳥番屋に長く滞在した加島祥造氏(当時『求めない』のミリオンセラーで時の人であった!)の前に正座して、「老子、タオ」の思想に、まさに真っ向から日々果敢に喰らいついていた。その時の千代麿さんの眼の光の鋭利犀利一途を私は今も忘れていない。その情熱の量いつも夥しかった。

千代麿さんの私に遺した彼の本質ののぞく俳句

破れたるまゝの蜘蛛の囿(い)クモは吾

逝去の悲しみは悲しみのまま涙拭って  
哀悼 愛悼 千代麿さん

See you soon, Catch you later! (ながや・のりこ)

小林 暁子

春の雪消えるが如く君去りぬ 暁子

改めて思い返してみると、霜田千代磨さんとは37年前のポ文協設立準備委員会で一緒に以来、2回のポーランド旅行、3回の池田町への修学旅行、2011年から毎年企画してきた午後のポエジアなど、ずいぶん行動を共にしてきました。

第2回ポーランド旅行の時「夏至」の初代主宰の依田明倫先生が沢山の俳句仲間を誘って参加してくださいましたのがご縁で、私は今から12年前、千代磨さんに勧められて入会しました。その後、推薦を受けて同人となった「古志」に偶然千代磨さんも入会していました。今考えてみると、生涯多くの事に情熱をこめて取り組んできた千代磨さんが、最後に全身全霊をもってやり遂げたかったのは俳句だったような気がします。

去年の9月8日、「夏至」の主宰・佐藤宣子先生から、

千代磨さんが句集を出すので10月20日までに120句選んでほしい、との電話がありました。そのすぐあと本人からも、選句依頼の電話があり、体調がすぐれず、選句ができないというのです。私が持っている千代磨さんの俳句の資料は、ここ12年の「夏至」「古志」「ポーレ」だけでしたが、意見を交換する時間はもうなかった。「任せるから」という言葉に押しされ、千代磨さんが残したいだろうと思う句を120句選び、10月16日に主宰にメールで送りました。

千代磨さんにもその旨報告し「とてもいい句ばかりで選ぶのに苦労しました」というと、「ああよかった」と笑っていました。千代磨さんの生きた証の句集は、3月上旬に出来上がりました。



句の道を求め求めて梅の里 暁子

(こばやし・あきこ)



新刊  
紹介

### 『祖霊祭』による祖霊祭

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ(編)

スレウヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館 刊 2023.12

Inne, a jednak *Dziady*. (ed.) Jadwiga Rodowicz-Czechowska. Muzeum Józefa Piłsudskiego w Sulejówku

ポーランド・アイヌ『祖霊祭』プロジェクト2022の報告書が発行された。プロジェクトはヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日ポーランド大使が実施されたもので、この報告書にはポーランド語、英語、日本語と三か国語が並んでいる。

骨子は、ポーランドの詩人アダム・ミツキェヴィッチの作品「祖霊祭」と、アイヌ研究者として知られるブロンスワフ・ピウスツキからのアイヌの祖先への祈り(シンヌラップ)を結び付けたものである。

最初にピウスツキの孫である木村和保氏(1955～2022)の言葉が載る。これは2018年の国際会議での発言。祖父であるピウスツキのことから始まるが、研究と称して墓を暴き大学の倉庫に保管しているアイヌの人たちの遺骨が未だに返還されていないことなど。

この件に関しては別のページでも”涙をふいて／聞いてくれ／わたしの／涙も凍る話をな”と土橋芳美著『痛みをペンリウク～囚われのアイヌ人骨』(草風館、2017)から引用して訴える。

ロドヴィッチ氏は「祖霊祭」の内容を中心に、ミツキェヴィッチのことや治癒性のある独自の調味料キハダと言われる木の実のことなどを紹介している(今回の表紙=背景写真=がこの実)。

また2022年7月に札幌エルプラザで行われた「午後のポエジア」での『祖霊祭』の朗読が紹介されている。参加者として村咲紫音、村田謙、林家とんでん平、

氏間多伊子、ラファウ・ジェブカ、菅原未榮、シルヴィア・オレーヤージュ各氏の名前が載っている。

11月のかでの2・7での講演と朗読、シアターZOOでのポーランド・アイヌ祖霊祭“シンヌラップ・クンネニサツ”がアイヌ・日・英/波の三つの言語で表示され、告知ポスターや公演会の様子が写真などによって詳しく掲載されていて、カラフルで見ただけでも楽しい。

この報告書で個人的にいちばん注目したのは「アイヌ語に関するコンピュータと人工知能を用いた研究」というページだった。ブロンスワフ・ピウスツキは1902年ごろから蠟管約100本に生のアイヌ語を録音したのだが、なにせ100年のうちには相当数が紛失。また日本の同化政策によって母語が失われアイヌ語を喋れる方が減少している状況では、アイヌ語に限らず、少数民族の言語は十分な量の学習データが集まらない。では保存や復興にどう対処すべきかと考えて、文法解析や長いフレーズを短い語形に自動分割させるプログラムを開発した。そのために人工知能や自然言語処理という現代の技術が役立つという。Pepperロボとアイヌ語で会話するカール・ノヴァコフスキ博士の様子をミハウ・プタシンスキ博士が撮っている——イランカラプテ。

ユゼフ・ピウスツキ博物館刊、アダム・ミツキェヴィッチ・インスティテュート、ポーランド広報文化センター、北海道ポーランド文化協会が協力している。(村田謙)

## 松本照男氏の訃報に接して 尾形 芳秀

ポーランドでジャーナリストとして長く活躍された松本照男氏が4月18日に亡くなりました。氏は長年日本とポーランドの友好に努められ、その功績を称えて、2016年には在ポーランド日本大使館で外務大臣表彰を受けられました。

私と松本氏のご縁は、氏が「日本がシベリア出兵時にポーランド救済委員会からの要請により、シベリアのポーランド人孤児を救済したこと」を後世に伝えようとしていることを直接伺ったのが始まりでした。



松本照男氏, 2018.5  
ワルシャワ旧市街にて  
撮影 尾形芳秀

### 樺太残留ポーランド人の軌跡

一方、私は1905年の日露戦争後に樺太に残留したポーランド人に関心がありました。

日露戦争最後の戦いが樺太であった時、この島にそれまであったロシアの地獄のような流刑地は解体され、流刑囚は解放されました。その中にはロシア人のほか、ポーランドからの人々もいました。彼らは解放されて直ぐにも母国に帰ることができたのですが、母国は未だロシアの統治下にあり、母国の独立まで残留させてほしいと、戦闘中にもかかわらず願い出たのです。それは彼らのいう「ワルシャワ集落」(ノヴォ・アレクサンドロフスク、小沼)の人々でした。日本軍はその要請を受け入れ、約60名の残留が認められます。ロシア人の大半は沿海州に強制送還されました。

残留を希望したポーランド人たちは、サハリン島時代の20年間、そして樺太時代の40年間を日本人と共に過ごしました。樺太時代、彼らの子供たちは私たちと共に同じ学校で学び、中にはハルビン

のポーランド人学校に特待生として転校し医師となった人もおりました。

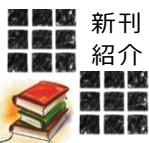
日本の敗戦により彼らとは長い別離があり、消息は不明でしたが、「ピウツキの蠟管」の報道があった1980年代から彼らの消息を探して再会し、B・ピウツキとの交流についての記憶を照会しました。その結果、1902年頃、ピウツキが極東からサハリン島南部のアイヌ民族調査に来た頃から彼らの支援(警備、輸送、宿泊、食料等)があったことが分かりました。サハリン島時代のポーランド人の支援無くしてピウツキの研究はあり得なかったとみられます。

この話を聞いた松本氏から「シベリア孤児救済」と相通じるテーマなので、ぜひ後世に遺してほしい」とのお誘いを受けました。「そのポーランド語版は私が引き受ける」ともいっていただきました。しかし、多くの資料の解読と執筆に手間取り、それが間に合わなかったことは本当に悔やまれます。

これまでのご厚誼に感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

(おがた・よしひで、樺太郷土史研究会及び本会会員)

## 霜田千代麿さんの俳句を読んで 嵩 文彦



新刊  
紹介

樹木は何千年生きてきても、もう生きるのに疲れはてた、もういつ終わってもいい、とは言いません。樹木は黙って枯れるまで生きてゆくだけです。

人は意識や言葉という余分なものを持ってしまいました。それで、詩を書いたり俳句を作ったりもします。「信じる」ことも人しかできない行為です。



霜田千代麿さんは『俳句の宙 2023 精選アンソロジー』(本阿弥書店)を残して逝かれました。十五人の作家の百句がそれぞれ掲載されて1冊にまとめられたものです。

私は五・七・五の定型を守るだけで句を作っています。その私に伝統俳句作家霜田千代麿さんの俳句を読む機会が与えられました。

雪と記し一日をはる日記かな

一日止むことなく雪が降っておりました。一日何も積極的にすることもなく過ごしました。

明治維新以来、立身出世せよ、克己勉励せよと

言われてきたことが、戦前・戦中派の頭にはこびりついています。無為に過ごすことは、決して悪いことではありません。新しいものを生むためには、休養を取ってエネルギーを蓄える必要があります。今の時代、頑張りすぎで鬱病になり、自ら命を絶つ人が出ます。雪のふる静けさをゆるやかに過ごし、日記に「雪」とだけ記すのは、とてもいいことです。

子規居士の目玉おそろし藤の花

この句は「瓶(かめ)にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり」が念頭に置かれています。腰椎カリエスで寝たきりの子規は死が近づ

いていても眼光鋭く、当たり前のことを当たり前と、見過ごすことなく観察いたしました。当たり前ですが、当たり前でいられることは、なんと素晴らしい僥倖でないでしょうか。一個の爆弾も、大地震も、たちまち私たちの平安を壊してしまいます。死の迫る病者にとって、なによりも平安は大切なものです。

畑、蛙、ボウフラと我慈雨を待つ

ボウフラはやがて蚊になって人畜に害を与えます。それが、畑という食料生産の場と、「古池や蛙飛び込む…」の愛らしい蛙と「我」が一緒に並べられているところがこの句の目玉でした。私たちは「万物の霊長」として、利害で生き物の生命と奪を決めています。水が命の「我」もそれらと一緒に、大地への慈雨を希求しています。生物の命の平等感が主眼の句ですが、ユーモアがあります。

物忘れ梅つこ散ればほけが咲く

「ぼけ」は「木瓜」と「呆け」を掛けていますね。認知症は人生50年の時代には見られないものでした。長

寿が当たり前の時代です。ユーモアでもって、自分の老化と向き合えるように、日頃からの準備が必要です。「物忘れ」は高齢になれば、誰にでも見られることで、必ずしも認知症の前兆ではありませんけれど。

蟻うごき農夫もうごく日向かな

「蟻動き」と漢字を使つては絶対いけないところですか。「うごき」とすると小さな蟻の懸命な動きが、そして年食った農夫の広大な大地に取り付いて働いている姿がよく表われてきます。「日向」としたのは霜田さんのやさしさの現われです。「日向」はやわらかな言葉です。「日差し」はいかにも強い日光を思わせ、霜田さんはそれを避けたのでしょう。

霜田千代磨さんに、こんな句もありました。「うらめしや子持ち鯛(はたはた)口あけて」動物はほかの生き物の命を貰って生きてゆかねばなりません。それを「業」としてとらえるのは仏教になじんだ私たちに特徴的なことのように思います。

良い機会に恵まれました。深謝いたします。

(だけ・ふみひこ、現代俳句作家・詩人、本会会員)

## 北海道医療大学とルブリン国立医科大学の学術交流

2024年6月中旬、ルブリン国立医科大学との学術交流の一環としてマリア・ミエルニク=ブラシュチャク教授=写真右=が北海道医療大学(当別町、札幌市)を訪れました。同教授は小児歯科を専門としています。訪問時には当別とあいの里のキャンパスを訪れ、日本の歯科治療に関する現状を把握するとともに、ポーランドの小児歯科に関するセミナーを行いました。

滞在中の休日には、支笏湖や積丹半島にも足を運び、かつてないほどの好天に恵まれたこともあり、北海道の自然の美しさに魅了されていました。

本年9月には、北海道医療大学歯学部 of 古市保志学部長がルブリンを訪問する予定です。また、心理科学部分野での協力も期待されており、今後の両大学間の関係発展が楽しみです。

(シルヴィア・オレーヤージュ、佐藤圭史

Sylwia Olejarz, Sato Keiji, 北海道医療大学)



【5頁よりつづく】

《第112回例会》『Ainu | ひと』上映 ◆アンケートの感想より

<p>日英での報告で、130年の時をへて現代の人が英国を訪れた話を聴くことができ良かった。また、現代も平取町では、文化が守られているだけではなく、復活して、現代も生きて発信されているのはどうしてかを映画から知る事ができてとても良かった。(50代)</p>	<p>平取の春夏秋冬を通し、そこに累々と根づいて来たそれぞれのAinu   ひとたちの生活、祈りが画面の中から感じられ、改めて文化や民族を継承していくことの大切さや難しさを理解させて頂くことが出来た作品だと思いました。より多くの人たちにこの作品を見てもらうことにより、アイヌ文化を理解する機会になるものと信じます。良い機会をありがとうございました。</p>
<p>ドキュメンタリーは、なかなかの力作。アイヌ文化の中核となる「アイヌ語」を伝えることが、いかに大切か、再認識しました。先住民の権利について国際的な連帯をもっと強めてほしい。(70代)</p>	<p>映画が終わった後、彼らの自然との共生、他者との共生という考えに共感と癒やしを感じました。美しかったです。祖先から受け継がれてきた自然(神)に対する敬いの心と深い知識をもって自らも自然の一部として生きていच्छる。アイヌ文化を次代に引き継ぐことは簡単ではありませんが、日本の重要な文化として引き継ぐことが必要だと思いました。しかしアイヌの方々に対する差別は過去のことではなく、現在進行形の問題です。それで言うと、4人の登場人物のなかでお若い方の経験に基づく発言が最も重要で、そのような経験をする事のない社会を創ることがアイヌも含めた私たち全員の責任だと考えます。(60代)</p>